

山背の古道と寺院跡について

磯野 浩光

1 はじめに

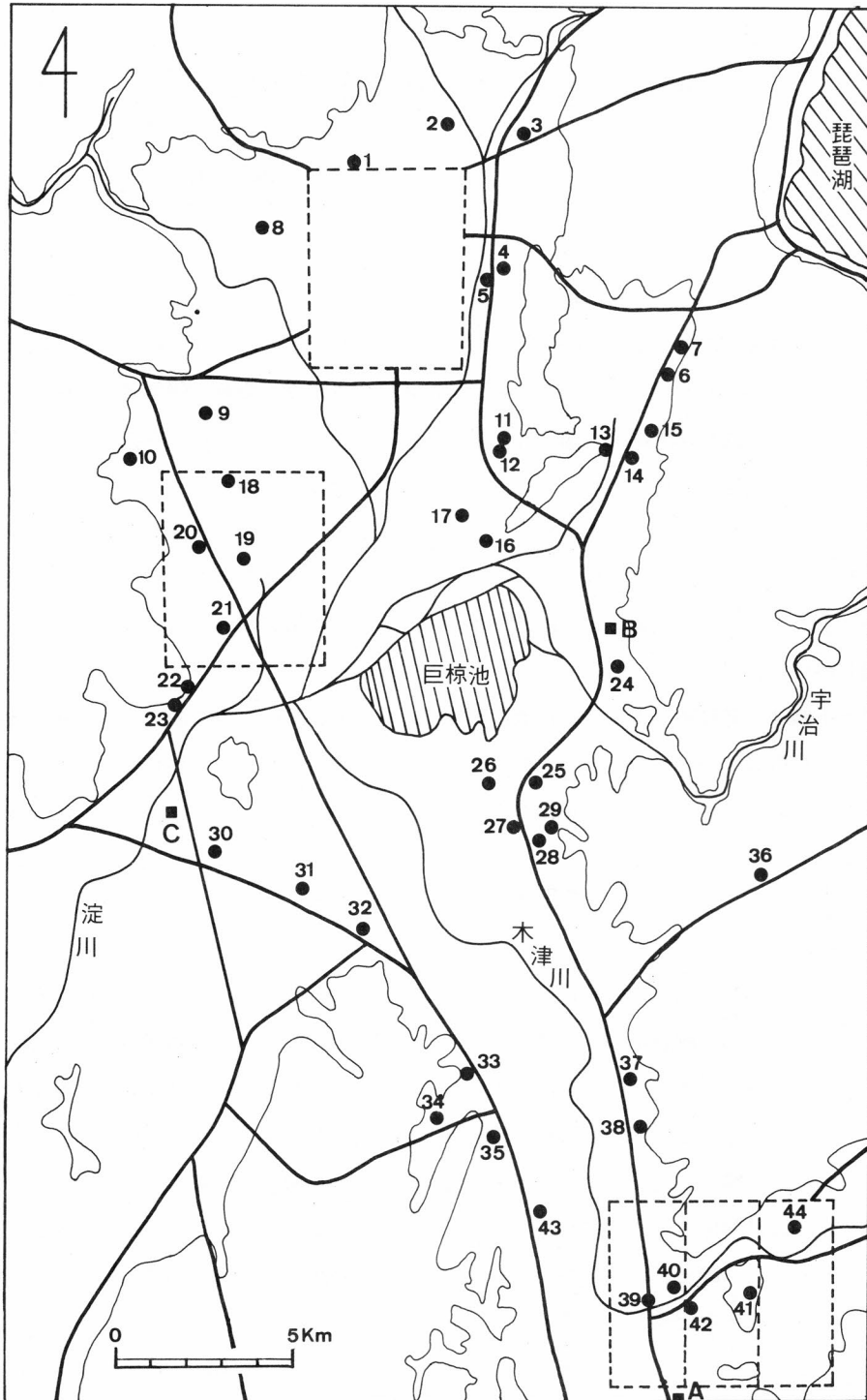
上人ヶ平遺跡の存在する奈良山丘陵一帯は、平城宮や南都の諸大寺に供給する瓦類を生産した場所として有名である。上人ヶ平遺跡が隣接する市坂瓦窯跡に関する工房跡であるのはじめ、歌姫瓦窯跡、音如ヶ谷瓦窯跡など多くの瓦窯跡の存在が確認されている。なぜこの地に瓦窯が集中したのかについては、当然平城京に近接していることや、「青丹よし 寧楽^なの京師^{みやこ}は 咲く花の にはふがごとく 今さかりなり」(『万葉集』巻第3-328)と歌われたように、良質の丹(ニ、埴土、粘土)を出すことが理由¹として考えられるのであるが、上人ヶ平遺跡に顕著なように、大和と山背²を結ぶ古道に沿って営まれていることも看過しがたい。

以下小稿は、奈良時代までの山背地方の古道を概観し、その古道に沿って寺院跡が分布することを指摘するものであるが、紙数の制限もあり、この分野で永年研究を続けておられる多くの方々の貴重な研究、報告のすべてを取り入れることができなかつたことを深くお詫びしておきたい。

2 山背の古道

第1図に、山背の古道と飛鳥時代から奈良時代までの寺院跡の分布を示した。これについて、まず古道から解説を加える。この図は『山城志』をもとに、足利健亮氏や環境文化研究所などの研究成果³から古道を復元したもので、近世の街道や現在は通行不可能な想定路も図示している。享保19年(1734)に並河永が編纂した『山城志』巻2 疆域の項には、里数、通過地点、路の險阻、広狭まで注記した大変詳しい街道についての記事があり、いわゆる京の七口に対応する「官道」として、東国路、大和路、西国路、丹波路、長坂越、久多越、龍華越の7路と、これ以外の「間道」として嵯峨路以下26路の山城国内及び国外への街道・峠道などを記載している。

この記事によってやや詳しく見てみると、まず大和路は、五条口から東福寺門前、稻荷、深草、藤森、伏見豊後橋、巨椋羽拍子、広野新田、平川、久世、寺田、長池、奈島十六、玉水、綺田綾杉藪、木津、一坂を経て、大和添上郡に至る道筋である(地名は、すべて『山



第1図 山背の古道と寺院跡略図(1~44—寺院跡 第1表参照)

A—上人ヶ平遺跡 B—隼上り瓦窯跡 C—平野山瓦窯跡

城志』記載の通過地点、以下同じ)。これは、現在奈良街道と呼んでおり、宇治市や城陽市域では当時の街道が現在も道路として機能しており、道端には近世年号を持つ道標が現存している。

木津川西岸の道筋は、西国路の支路で、歌姫越と記載されている。この歌姫越は、淀で西国路から分離し、美豆、下奈良、上奈良、岩田、薪、田辺、興戸、高木、菱田、下狛、祝園、菅井、吐師を経て大和添下郡に至るもので、現在の府道八幡木津線がその道筋をほぼ踏襲している。

東国路は、三条口、粟田口、日岡、御陵、竹鼻、四宮辻、逢坂山を経て近江に至る道筋(近世の東海道)で、近世年号を持つ道標が各所に現存する。この道筋の四宮辻からは支線として、東北へ向かい近江湖西の園城寺付近へ通じる小関越がある。

西国路は、東寺口、吉祥院、石原、上久世、大藪、下久世、寺戸、向日町、開田、馬場、神足、調子、円明寺、山崎駅関戸を経て摂津に至るもので、西国街道と呼ばれている。この道筋の吉祥院からは支線として久我駈があり、塔森、久我下、植野、山崎に至る。西国街道も乙訓地域では現在その一部が通行可能で、近世年号を持つ石燈籠などが現存し、久我駈も一部現存しており、通行可能である。

丹波路(旧名大枝道)は、七条口、川勝寺、下桂、川島、榎原、塚原、杳掛を経て丹波桑田郡界の峠に至るもので現在も榎原、塚原、杳掛付近は国道9号線の旧道として残っており、榎原宿の本陣も現存する。

そのほか、小稿にかかわるものに、京北町周山方面へ至る長坂越、高雄越、若狭・近江方面へ至る久多越、龍華越、山中越などがある。

これらの道筋は、地形的にみて無理な道筋ではなく、地図上での厳密な道筋の確定にはなお検討の余地は残るが、古代中世の史料によってこの道筋上での人や物の移動がうかがえるものは、古代、中世に遡る可能性がある。

まず、古代の官道は、宮都を中心に全国に延びていたが、大和路の南半は、藤原京の時期から一貫して北陸への道筋であった。この道筋が古いことは、『日本書紀』(以下、『紀』と略記する)欽明31年7月是月条や『万葉集』巻第13-3236、3240の歌などからうかがえる。この道筋から宇治田原を経て瀬田に至る「田原道」は、天平宝字8年(764)、藤原仲麻呂の乱に際して、孝謙上皇軍がこの道筋をとって先回りして勢多(瀬田)橋を焼いたことで機先を制し、仲麻呂の敗走につながっている。⁴

次に、歌姫越、木津川西岸の道筋は、平城京の時代には一部山陽道にも用いられたもので、さらに、丹波、日本海沿岸方面と大和を結ぶ道筋であった。これについては、古山陰道の想定復元案⁵もあり、『紀』垂仁15年8月条の丹波道主王の娘の伝承などもこの道筋の

古さを示している。またこの道筋から北河内の樟葉に抜ける道筋は、『古事記』崇神段や『紀』崇神10年9月条の武埴安彦反乱伝承における武埴安彦軍の逃走路で、地名起源伝説にもなっており、史実ではないが、少なくとも記紀編纂当時の交通路を反映しているであろう。さらに、平城京遷都にもなっており、駅家が整備され、和銅4年(711)、綴喜郡に山本駅がおかれ、この駅家は木津川西岸の田辺町三山木付近に比定されている。

木津川を東へ遡る道筋も平城京の時代には東海道になり、和銅4年(711)に相楽郡岡田駅が設置されており、天平14年(742)には恭仁京から紫香樂宮に通じる「恭仁京東北道」が開通している。また山背と北河内を結ぶ複数の道筋も継体が大和に入る前に遷都を繰り返した伝承にかかわり、通交の盛んなようすがうかがわれ、古い要素が指摘できる。京都市東北から白川道を経て近江に抜ける山中越は、弘仁6年(815)桓武天皇が崇福寺を経由して唐崎へ至った道筋であり、平安京から南下する鳥羽の作り道も『徒然草』第132段の逸話から遅くとも10世紀前半にはその存在が知られ、久我暲も『徒然草』第195段や『太平記』第巻9山崎攻事付久我暲合戦事などに散見する。

さらに西国街道、久我暲、白川道は発掘調査で直接古道に伴う遺構が検出されている⁹。

以上、山背の古道を近世の街道を手がかりに検討すると、古代、中世に遡る可能性の強いものも多く、現在も通行可能であったり、現在も道路として機能しているものがあるなど、現代に続くという歴史的意義が指摘できる。

さらに、古道の複線化という観点から検討しても興味深い。複線化とは、2地点間を結ぶ単線路、直線路だけでなく、主と副の2路ないし3路以上の複数の道筋が存在することで、古道を考える時につねにこのことを念頭に入れておく必要がある。また、水上交通と陸上交通の並存も複線化の一つといえる。山背地方南部では木津川を遡ったり、宇治川を下ったりする水上交通と木津川兩岸の道筋があり、これは典型的に水上交通と陸上交通が複線化している例である。この複線の道筋は、飛鳥時代から存在しており、現在の国道24号線と府道八幡木津線やJR奈良線と片町線も木津川兩岸に沿って、南北に並走して敷設されていることは興味深い。さらに、山背と北河内を結ぶ道筋は、荒坂越、普賢寺越、天王越などと多く、山背と近江を結ぶ道筋にも、龍華越(途中越)、山中越、如意越、小関越、逢坂越、牛尾越、醍醐越などがあり、複線化の例として注目される。また古道には、宮都をもとにする古道体系の変化など時代的変遷があり、時代によっては複線の道筋の主と副との比率が異なったり、主と副とが逆になったりすることもある。

3 山背の寺院跡

次に寺院跡について検討してみたい。山背において、現在まで確認されている飛鳥時代

第1表 山背の古代寺院跡一覧表(飛鳥時代～奈良時代)

	名称	所在地	時代	概要	出土遺物	備考
1	北野廃寺跡	北区北野白梅町	飛鳥前期～平安	瓦積基壇(講堂) 築地	塑像片、飾金具、 緑釉陶器	
2	出雲寺跡	上京区御霊堅町	飛鳥～平安		瓦	上御霊神社境内
3	北白川廃寺跡	左京区北白川大堂町	飛鳥後期～鎌倉	瓦積基壇(建物、塔) 回廊	鴟尾、鉄製品 緑釉陶器	
4	法観寺	東山区八坂上町	飛鳥後期～		瓦	法観寺旧境内
5	珍皇寺	東山区小松町	奈良～平安		瓦	愛宕寺跡?
6	大宅廃寺跡	山科区大宅鳥井脇町	飛鳥後期～平安	金堂、講堂、中門	緑釉陶器	
7	元屋敷廃寺跡	山科区大塚元屋敷町	奈良		瓦	
8	広隆寺	右京区太秦蜂岡町	飛鳥前期～	礎石、築地	瓦	
9	椋原廃寺跡	西京区椋原内垣外町	飛鳥～平安	瓦積基壇(八角塔) 中門、回廊、築地	瓦 緑釉陶器	国史跡
10	南春日町廃寺跡	西京区大原野春日町	奈良～平安	建物跡(塔?)	鉄風鐸、瓦 二彩陶器	
11	おうせんどう 廃寺跡	伏見区深草谷口町	奈良～平安	建物跡	仏像片、緑釉 陶器	
12	がんぜんどう 廃寺跡	伏見区深草谷口町	奈良～平安		緑釉陶器	
13	法琳寺跡	伏見区小栗北谷町	飛鳥後期～平安		緑釉陶器	
14	醍醐廃寺跡	伏見区醍醐西大路町	飛鳥後期～平安		緑釉陶器 三彩陶器	
15	小野廃寺跡	伏見区醍醐大高町	飛鳥後期	礎石	瓦	
16	御香宮廃寺跡	伏見区桃山御香宮門 前町	飛鳥後期～平安		瓦	御香宮神社境内
17	板橋廃寺跡	伏見区下板橋町	飛鳥後期～奈良		瓦	板橋小学校内
18	宝菩提院廃寺跡	向日市寺戸西垣内	飛鳥後期～室町	塔心礎、井戸	埴、彩釉陶器	
19	吉備寺廃寺跡	向日市上植野吉備寺	奈良～平安			
20	乙訓寺	長岡京市今里	飛鳥後期～	建物跡(講堂、僧坊) 礎石、築地	埴仏、古銭	
21	鞆岡廃寺跡	長岡京市友岡	飛鳥後期～平安	建物跡	瓦	
22	山崎廃寺跡	大山崎町大山崎	飛鳥後期～平安		瓦	観音寺境内
23	山崎院跡	大山崎町大山崎	奈良	塔心礎	埴仏	
24	大鳳寺跡	宇治市寛道西中	飛鳥後期～平安	瓦積基壇(金堂)、 建物跡、築地	三彩陶器	
25	広野廃寺跡	宇治市広野東裏	飛鳥後期～平安		瓦	
26	林寺跡	久御山町林高黒	奈良	土壇		高黒廃寺跡
27	平川廃寺跡	城陽市平川古宮	飛鳥後期～平安	瓦積基壇(金堂、塔) 回廊、築地	塑像片、瓦埴、 金具	国史跡
28	久世廃寺跡	城陽市久世芝ヶ原	飛鳥前期～鎌倉	瓦積基壇(金堂、講 堂、塔)、南門、回 廊、築地	誕生仏 瓦埴	
29	正道廃寺跡	城陽市寺田正道	飛鳥後期～奈良	官衙遺跡	塔相輪片、 瓦埴、埴仏	国史跡
30	西山廃寺跡	八幡市八幡	飛鳥後期～近世	塔基壇、金堂、築地	瓦埴、緑釉陶器	足立寺跡
31	志水廃寺跡	八幡市八幡月夜田	飛鳥後期～平安	瓦積基壇	瓦埴	

	名称	所在地	時代	概要	出土遺物	備考
32	美濃山廃寺跡	八幡市美濃山	飛鳥後期～奈良	建物跡	瓦	
33	興戸廃寺跡	田辺町興戸	飛鳥後期～鎌倉		緑釉陶器、瓦	
34	普賢寺	田辺町普賢寺	飛鳥後期～	塔礎石	灰釉陶器、瓦	
35	三山木廃寺跡	田辺町宮津	飛鳥後期～鎌倉		瓦	佐牙神社南
36	山滝寺跡	宇治田原町荒木	飛鳥後期～鎌倉	礎石? (大宮神社手洗鉢)	瓦	
37	井手寺跡	井手町井手	飛鳥後期～平安	礎石	瓦、鏡、古銭	
38	蟹満寺	山城町綺田浜	飛鳥後期～	瓦積基壇(金堂)	瓦	
39	泉橋寺	山城町上狛西下	飛鳥後期～	礎石	瓦	
40	高麗寺跡	山城町上狛高麗寺	飛鳥前期～平安	瓦積基壇(金堂、塔講堂)回廊、築地	瓦埴、金具	国史跡
41	鹿山寺跡	木津町鹿背山	奈良～中世		瓦	
42	燈籠寺廃寺跡	木津町木津	飛鳥～奈良	土壇	瓦	
43	里廃寺跡	精華町下狛里垣内	飛鳥後期	土壇	瓦	想念寺西
44	山城国分寺跡	加茂町例幣	奈良～平安	瓦積基壇(金堂、塔)礎石、建物跡	風鐸、瓦	国史跡 恭仁宮

本表の作成には、『京都府遺跡地図』第4、第5分冊(京都府教育委員会、1989年3月、1985年3月)、各調査報告書などを参考にしたが、煩をさけるため、すべて出典を注記しなかった。御寛恕をお願いしたい。

から奈良時代までの寺院跡の概略は、第1表のとおりである(第1表と第1図の番号は対応する)。

飛鳥時代前期(おおむね7世紀前半)の寺院跡は、従来から広隆寺、北野廃寺跡、久世廃寺跡、高麗寺跡の4寺の存在が指摘されている。広隆寺、北野廃寺跡の双方は、『紀』推古11年(603)11月己亥条の蜂岡寺や同31年(623)7月条の葛野秦寺にあてる説もあるが、定説には至っていない。また、久世廃寺跡と高麗寺跡は飛鳥時代前期の瓦類が出土しているもののこれに伴う直接的な遺構が検出されていない。従って、小稿ではひとまず飛鳥時代寺院跡と古道の関係については、保留しておきたい。

次に、飛鳥時代後期(白鳳時代、おおむね7世紀後半)に存在した寺院数は、飛躍的に増加し34寺にも及ぶ。この時期には、古道をもとに藤原京という都城が成立し、藤原京を中心とする古道の体系が整えられる。山背では木津川東岸の古道が北陸道に、同東岸の城陽市市田付近から分かれる田原道が一説に東山道に、同西岸の古道が山陰道になり、これらの古道に沿って20寺前後の寺院が造営されている。またこの時期、京都市山科近辺、城陽市久世近辺など寺院の集中して造営される地域がある。

奈良時代(8世紀)は、平城京を中心とした古道体系が確立する時期で、山背では一時期恭仁京(740～744)も造営される。藤原京の時代から引き続き、木津川東岸の古道が北陸道、田原道が一説に東山道、同西岸から乙訓を経て老坂に至る道筋が山陰道であり、木津川西岸から河内樟葉に至る山陽道、恭仁京から伊勢に向かう古道が東海道と多くの官道が山背国内を通過している。この時期の寺院は44寺が存在し、28寺前後がこれらの官道に沿っている。さらに、城陽市久世近辺や田辺町三山木近辺、山城町上狛近辺など寺院跡の集中す

る地域が存在し、各々久世郡衙、山本駅、山背国府など公的な施設の存在が想定されている地域であり、古道相互や水運が交差する、いわゆる交通の要衝と言うべき地域と重複している。また、第1図に明らかなように、官道以外の古道を考えると、この時期の寺院跡はおおむね古道に沿って建立されている。つまり、第1表の44の寺院跡のうち、古道に沿うものが38寺前後(約85%程度)、官道に沿うものが28寺前後(約60%強)であり、山背の古代寺院跡のほとんど大半が古道に沿っていると指摘できるのである¹²。

4 おわりに

次に、古道に沿って寺院跡が存在する理由を少しく検討したい。これについては前提として、古道の整備が先で、これに沿って寺院が造営されたものとまず考えられる。そして、寺院を建立した氏族について考えると、山背の氏族では、渡来系氏族の秦氏が有力であり、広隆寺や北野廃寺跡に関係したことが指摘されている。さらに、狛氏=高麗寺、八坂氏=法観寺など渡来系氏族が寺院建立にかかわったことも従来から示唆されており、出土遺構から高句麗との深い関係も想定される檜原廃寺跡も存在し、これら渡来系氏族が関係したとされる寺院跡には見るべきものがある。また、古代の名族ワニ氏の存在も注目される。ワニ氏は、大和の東北(天理市櫛本町付近)を本拠としているが、山背東北部一帯や近江湖西の小野や春日の地とも関係が深く¹³、本拠の大和の東北と山背の東北、近江の小野、春日を結ぶ道筋が、木津川東岸から宇治、山科を経て近江湖西へ至る古道である。この道筋とワニ氏との関係は注目すべきで、ワニ氏の同族(小野、栗田、大宅氏など)と関係する寺院がこの道筋に存在した可能性も考えられる。

さらに、山背の古代寺院跡の分布について、氏族と壬申の乱とのかかわりによって、3系統に分類したり¹⁴、7、8世紀にこの地方の氏族掌握のために、官が造寺に密接に関与したとする説や川原寺式軒丸瓦を詳細に分類検討し、各々の特徴を指摘した説がある¹⁵。これらの説を詳細に検討する余裕はないが、やはり官道に沿う寺院は、大和の王権や国家との関係の深いことがうかがわれる。また、山背の氏族が44の寺院の建立すべてにかかわったとするのも疑問であり、氏族の力を越えた勢力(王権、国家)の関与は当然考えられる。宮都の存在した大和の北に隣接する山背地方は、北への道筋をはじめ多くの古道が通じており、これらの交通路の掌握は、政治的、経済的、軍事的にも意味が大きく、寺院の建立、維持が交通路の掌握と密接な関係があったと考えられる。

最後に瓦窯跡の分布についても、少しく触れておきたい。すなわち、古代の瓦窯跡で、近年発掘調査の実施された、隼上り瓦窯跡(史跡、宇治市菟道)や平野山瓦窯跡(八幡市橋本)は、その供給先が、それぞれ、大和の豊浦寺跡(奈良県明日香村)、難波の四天王寺(大

阪市天王寺区)であることが明らかになっている貴重な遺跡である。また、寺院とそこに瓦を供給した瓦窯がかなり隔たっており、これについては、さまざまな要因が考えられるが、これらの瓦窯跡は供給先が遠隔地であってもやはり瓦の運搬の便を考慮して、古道沿いや水上交通に便利な地点に築造されていることは注目すべきである。従って、再び上ヶ平遺跡を見た時、やはり古道との関係が重要であり、この観点からの考察の必要性も再認識されるのである。

(いその・ひろみつ=当センター)

- 1 和田萃「ハニ・土師氏・古墳」(同志社大学考古学シリーズ1『考古学と古代史』 1982年10月)。
- 2 小稿では、主に奈良時代以前の山背を取りあげるので、山背を用い、明らかに平安時代以降の場合は山城と記す。
- 3 足利健亮「山城国」(藤岡謙二郎編『古代日本の交通路I』大明堂、1978年3月)。環境文化研究所『歴史の道シリーズ4いまに生きる京の道—平安京からの道』(1983年6月)。
- 4 『続日本紀』天平宝字8年9月壬子条。なお、奈良時代の田原道を粟谷越に比定する説がある。乾幸次『南山城の歴史的景観』p81(古今書院 1987年2月)。
- 5 足利健亮『日本古代地理研究』第2章 p10~p11(大明堂 1985年11月)。
- 6 『続日本紀』和銅4年正月丁未条。
- 7 『続日本紀』天平14年2月庚辰条。
- 8 『日本後紀』弘仁6年4月癸亥条。
- 9 西国街道—「山城国府跡地域の発掘調査」(現地説明会資料 大山崎町教育委員会 1989年10月)。久我暉一戸原和人ほか「長岡京跡左京第53次(7 ANMSB地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 1985年3月)。白川道一岡田保良・吉野治雄「京都大学本部構内AW28区の発掘調査」。浜崎一志「昭和56年度京都大学構内の試掘、立合調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度・昭和56年度 京都大学埋蔵文化財研究センター 1980年3月 1983年3月)など。
- 10 戸田芳実「古道踏査と中世史研究」(『日本史研究』第223号 1981年3月)。
- 11 和田萃「河内の古道」(『環境文化』第51号 環境文化研究所 1981年6月)。
- 12 この古道と寺院跡の関係は、山背と接する摂津、近江、丹波の境界付近でもある程度指摘できる。摂津—西国街道沿いの梶原寺跡(高槻市梶原、奈良)、芥川廃寺跡(同市郡家、奈良)。近江—山中越沿いの崇福寺跡(大津市滋賀里町、飛鳥後期)、南滋賀町廃寺跡(同市南志賀、飛鳥後期)、小関越沿いの園城寺前身寺院(同市園城寺町、飛鳥後期)。丹波—丹波路沿いの観音芝廃寺跡(亀岡市篠、飛鳥後期)、高雄越沿いの周山廃寺跡(京北町周山、飛鳥後期)など。
- 13 岸俊男「ワニ氏に関する基礎的考察」(同氏著『日本古代政治史研究』 塙書房 1966年5月)。
- 14 高橋美久二「山城国葛野・乙訓両郡の古瓦の様相」(『史想』第15号 1970年6月)。
- 15 森郁夫「畿内における平城宮系軒瓦の一側面」(『国学院雑誌』第78巻第9号 1977年9月) 同「古代山背の寺院造営」(『学叢』第8号 京都国立博物館 1986年3月)。
- 16 森下衛「南山背における川原寺式軒丸瓦について」(『史想』第21号 1988年3月)。